

茨城県農業総合センター 農業研究所 NEWS

No.294

2019/1/4

I いばらき農業アカデミー

「品目別栽培技術高度化講座」を開催しました

近年、県西・県南地域を中心にイネ縞葉枯病の発生が増加しており、被害軽減のためには地域全体で対策技術を徹底していくことが重要です。

平成30年7月30日に筑西合同庁舎において、県西地域イネ縞葉枯病対策連絡協議会との共催により、いばらき農業アカデミー「品目別栽培技術高度化講座【イネ縞葉枯病の発生状況と防除対策】」を開催しました。当日は生産者、JA、関係団体、企業、国、市町村、県関係者など124名が参加しました。

1. 室内検討

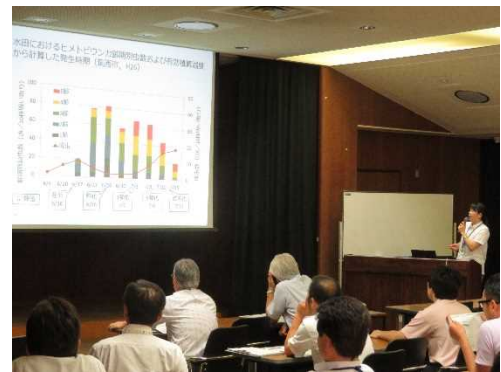
まず、農業総合センター病害虫防除部の大田主任から、イネ縞葉枯病の現在の発生状況について説明がありました。今年度は気温が高いため、防除適期が早まっていると注意喚起がありました。また、収穫以降もホームページによる情報提供が行われるということでした。

続いて農業研究所病虫研究室の諏訪主任研究員から、これまでに得られた防除対策の成果や今年度の試験の実施状況について説明を行いました。また、イネ縞葉枯ウイルスを媒介するヒメトビウンカや発病株、投げ込みタイプの殺虫剤サンプルを参加者に見てもらい、理解を深めてもらいました。

2. 圃場見学

室内検討会の後、合同庁舎近くの調査水田において、イネ縞葉枯病の見分け方や今年の発生状況の説明を行いました。今年度は、ヒメトビウンカの発生が早かったことから本病の発生時期も早まりましたが、防除意識が高まってきたことで防除が徹底され、発生は少なめでした。

参加者からは、「積算温度での適期防除、投げ込み防除は今後の対策に有効と考えられる。参考になった。」、「毎年開催してほしい。」、「ヒメトビウンカの薬剤感受性検定結果が気になる。」、「コシヒカリに替わる抵抗性品種の育成を希望する。」などの感想がありました。農業研究所では、縞葉枯病沈静化のために関係機関と協力して、さらに防除対策の検討を進めていきます。



室内検討の様子（諏訪主任研究員）



会場展示物

(発病株、ヒメトビウンカ、投げ込み剤)



調査圃場の見学

Ⅱ 「農匠ナビ1000技術展&シンポジウム2018

in つくば」を開催しました

平成30年8月7日につくば国際会議場において、いばらき農業アカデミー「先進農業技術講座【農匠ナビ1000技術展&シンポジウム2018inつくば】」を開催しました。当日は、生産者や県内外関係機関など、211名が参加しました。また、大井川知事も出席し、技術展を観覧しました。

※農匠ナビ1000（次世代大規模稲作経営革新研究会）とは、農林水産省予算により実施している「革新的技術開発・緊急展開事業」の研究コンソーシアムの一つです。米の生産コスト低減、収量・品質の向上、省力化を目的に研究を行っています。

1. 農匠技術展

研究機関6機関（茨城県、福岡県、九州大学、農匠ナビ(株)、東京農工大学、農研機構農業技術革新工学研究センター）による農匠ナビ1000の研究成果と、協力企業5社（ソリマチ(株)、ヤンマーアグリ(株)、富士通(株)、積水化学工業(株)、JA三井リース(株)）による関連技術の展示を行いました。参加者は自由に各ブースを見て回り、技術の説明を受けたり、意見交換を行ったりしました。

大井川知事には、茨城県の米生産費（60kgあたり）20%削減に向けた取組み状況と流し込み施肥装置の開発状況、農匠ナビ(株)で開発した自動給水システム、九州大学で開発しているプラットフォーム、ソリマチ(株)の農業簿記システム、富士通(株)の農業経営支援システムについて説明しました。

2. シンポジウム

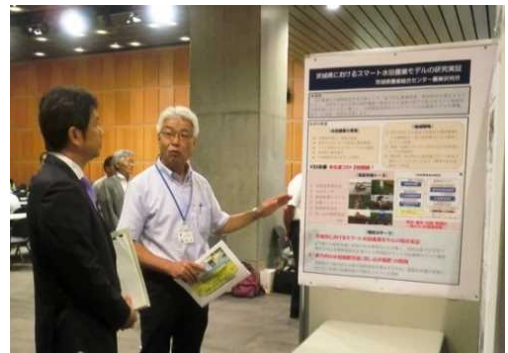
「世界視点と農家目線で考えるわが国の稲作経営の展望」をテーマとし、九州大学 長命助教を座長に5人の講演者からの報告と総合質疑が行われました。

総合質疑では、中南米の稲作や海外における日本産米の評価など、ワールドワイドな話題について活発な意見交換が行われました。「海外では寿司を通じて日本産米を食べる機会が多い（ただしカリフォルニアロール）」、

「日本産米を美味しいと感じてもらうには、食べ慣れてもらうことが重要」、 「日本産米の輸出戦略としては、ワインを参考にすると良いのではないか」など、今後の輸出展開に向けたヒントも得られました。また、コロンビアから来日した生産者からは、「コロンビアの米は自然の水と太陽の光で育って、宝石のように思っている。日本でも同じように丹精を込めて作られていることに感銘を受けた。」とのコメントを頂きました。

・世界視点から見た農匠ナビ1000研究プロジェクトの成果（九州大学 南石晃明 氏）

プロジェクトにおける研究内容と成果の紹介とともに、世界視点でみた次世代稲作経営の課題についてご発表頂きました。「面積拡大を図りながら、生産コストの低減と品質向上の両立を実現」、「消費者に価格以上の価値をいかに伝えるか」、「自社の経営の強みを世界視点で考えること」が必要になるとの提言がありました。



大井川知事に農業研究所の取り組みを説明する渡邊所長



シンポジウムの様子

- 稲作経営者から見たイタリア、アメリカ、コロンビアの稲作（横田農場 横田修一 氏）

平成29年に研修や調査で訪れた各国の米生産に関する調査について、品種から流通まで様々な情報が提供されました。コロンビアは米づくりの歴史が一番浅いが、挑戦的で伸びしろがあるとのこと。そのような国から学ぶ点も多いのではないかとのご意見でした。

- 中南米における稲作研究の最新動向（国際熱帯農業センター 石谷学 氏）

中南米には広大な未耕作地、豊富な水資源があり、米生産にとって将来性の高い地域であるそうです。日本食レストランが増加していることから、日本産米の需要も見込めるのではないかとのご意見でした。

- コロンビア稲作の現状とSATREPSプロジェクトの取組み（東京大学 小川諭志 氏）

コロンビアにおける稲作について紹介頂きました。米農家の作付面積は1ヘクタール規模から500ヘクタール規模、機械化は進んでいるところも多く、日本製品も使われているそうです。低投入で環境負荷の少ない栽培方法の確立や技術者の育成など課題は多いようです。

- 茨城県における省力低コスト高収量生産技術の実証と実践（茨城県農業研究所 森 拓也 氏）

地域戦略目標とした米生産コストの現状から2割削減を達成するためのスマート水田農業モデルの構築に向けて、平成28年度から行ってきた県内4法人（エンドウファーム、ライス&グリーン石島、南太田営農組合、筑波農場）の経営改善事例を報告しました。また、実証4法人の各代表者から、取り組みの状況や試験結果の手応えなどを報告して頂きました。

Ⅲ 「茨城をたべよう収穫祭」に出展しました

平成30年10月13日（土）～14日（日）に常陸太田市の山吹運動公園において、「茨城をたべよう収穫祭」が開催されました。農業研究所では、農業総合センターのブース内に茨城県の米や麦の奨励品種を展示し、その特徴を説明しました。多くの方に農業研究所の取り組みを紹介することができました。



Ⅳ 未来を担う農業者の育成も支援しています

県立農業大学校の学生が見学に来ました

平成30年7月11日に県立農業大学校農業部の研究科1年生と普通作コースの1年生・2年生の計26名が、校外学習で来所しました。また、9月19日には農学科と畜産学科の1年生48名が来所しました。室内で農業研究所の概要を説明した後、圃場で水稻奨励品種決定調査、水稻の高密度播種育苗栽培、原原種栽培などの概要を説明しました。水稻の肥料三要素試験（窒素、リン酸、カリをそれぞれ欠乏させた試験）では、欠乏要素の違いにより生育状況に大きな差が出ることに興味を持った様子でした。



圃場の説明をする横須賀研究調整監

農業大学校のまだ若い学生たちです。これからいろいろな経験を積んで、茨城農業の明日を担う生産者に育ってくれることを祈っています。

高萩高校で出前授業を行いました

平成30年11月16日に県立高萩高校において出前授業を行いました。いばらき農業アカデミー「農業関係高校と農大の連携講座」の一環として実施したもので、茨城県の農業やICT等の先端技術を利用した農業について説明しました。また、サツマイモの試食も行い、県内で作付けの多い「ベニアズマ」と「ベにはるか」を食べてもらいました。生徒達からは、「農業の自動化が素晴らしいと思った」、「農業は大変だと思った」、「サツマイモがとてもおいしかった」などの感想がありました。

農業研究所では引き続き、若い世代に対して農業の魅力を伝えていく活動も進めてまいります。



生徒代表からの謝辞

V 海外研修生の視察受入れも行っています

毎年、多くの国々から研修生が視察に見えます。視察受入れを通じて国際協力にも貢献しています。今回の研修が各国の稲作技術向上や米の安定生産に少しでも役立つことを期待しています。

7月19日 JICA 研修員（作物研究室）

陸稲栽培・種子生産及び品種選定技術コースの研修生6名が来所し、水稻種子生産について視察しました。室内では本県的水稻品種選定と種子生産の流れについて説明しました。その後、水稻奨励品種決定調査や原原種生産の圃場などを見ながら、栽培管理や調査方法の留意点などについて説明しました。

研修生はアフリカ、オセアニア地域から来日し、約1年かけて陸稲の栽培や種子生産技術などを学ぶそうです。



9月28日、10月5日エチオピア国農業研修生（作物研究室）

JICA によるイネ品種開発と品種維持に関する研修の一環で、2名の研修生が来所しました。本年5月にも来所し、種子生産の仕組みについて研修したお二方ですが、今回はのべ2日間にわたり、水稻種子の収穫と調製作業を実地で学びました。



限られた時間の中でしたが、積極的に研修に取り組む姿が印象的でした。

作物の生育情報はこちら

農業研究所では、水稻・麦類・大豆・かんしょ・落花生の生育情報をホームページで提供しています。（<http://www.pref.ibaraki.jp/nourinsu/isan/noken/sokuho/sokuho.html>）

編集・発行／茨城県農業総合センター農業研究所
〒311-4203 水戸市上国井町3402
TEL 029-239-7211(代)
FAX 029-239-7306
Eメール nouken@agri.pref.ibaraki.jp
水田利用研究室
〒301-0816 龍ヶ崎市大徳町3974
TEL 0297-62-0206
FAX 0297-64-0667